SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

グローバルな視野からとらえた日本の茶と茶文化に関する学問横断的研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-03-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 戸部, 健 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/0002000386

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ１２３１８

研究課題名（和文）グローバルな視野からとらえた日本の茶と茶文化に関する学問横断的研究

研究課題名（英文）Cross-disciplinary research on Japanese tea and tea culture from a global perspective

研究代表者
戸部　健（Tobe, Ken）

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：２０５１５４０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近代における日本の茶業、および茶文化のありようをグローバルな視野から学問横断的に検討したものである。その課題に挑むため、研究チームは日本史、アジア史、イギリス文化研究の専門家らで構成された。研究の結果、近代において日本茶が生産されてから消費されるまでの各段階の様子を具体的に検討できただけでなく、各段階相互のミスマッチなども見出すことができた。また、その過程で、国内外の所蔵機関などにおいて、日本とアジアの茶業・茶文化関連史資料を収集した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
幕末以降日本茶はアメリカ合衆国をはじめ、ソ連や北アフリカなどにも輸出された。ただ、時代によって主な輸出先や輸出量は大きく変化し、最終的には1960年代に輸出はほぼ途絶した。なぜそのような紆余曲折をたどったのか。その背景については依然として検討の余地がある。本研究プロジェクトはそうした課題にグローバルな視点、かつ学問横断的な視野からに取り組んだところに学術的意義がある。また、そこから得られた知見は、今後の日本茶輸出のあり方を考えるための材料になると考える。

研究成果の概要（英文）：In this study, we examined trends in modern Japanese tea industry and tea culture from a cross-disciplinary and global perspective. To address this issue, we formed a research team with experts in Japanese history, Asian history, and British cultural studies. As a result of our research, we were able not only to specifically examine each stage from the production to consumption of Japanese tea in modern times, but also to discover mismatches between each stage. Furthermore, in the process, we collected historical materials related to the tea industry and tea culture in Japan and Asia both in Japan and overseas.

研究分野：中国近現代史

キーワード：茶　茶文化　地方文書　外国語文献

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は、戦前日本における重要な輸出産品であり、戦後においても山間部などでの主要な農産物として今なお盛んに栽培され続ける茶をテーマに、学問横断的な研究を行なったものである。

日本における茶栽培や茶文化をめぐっては、これまでも農学・経済学・民俗学・歴史学・文学といった個別の分野において研究がおこなわれ、一定の蓄積を成してきた。とはいえ、そうした研究が相互に結びつくことはこれまで必ずしも多くなかったし、未開拓の研究分野も豊富に残されていた。また、研究の多くは国内的関心から茶に注目するものであり、それがアジアや世界とどのような関係性を有したのか、ひいてはグローバルな場において日本茶がどのような意味をもったのかについては、検討が十分でなかった。

以上のような学術的背景から本研究プロジェクトの代表者は、「学問横断的かつグローバルな研究対象として近現代の日本茶業・茶文化を捉えることで、それらの持つ新たな可能性や、これまで顧みられなかった限界性を見出せないか」という着想を得た。茶は生産→出荷→輸送→再製→移出・輸出→販売→消費という一連の流れのなかで、実に多くの人やモノ、そして地域と関わりを持つ。また、よく知られているように茶は、各国や各地域において独特の消費文化を作り出している。そうした消費地での文化や志向の変化は、他方で原産国における茶の生産や販売・宣伝のあり方に大きな影響を与え、それがさらに生産地の社会・自然環境のありようや、物流の仕組みなどにも変化を与えた。こうした日本茶による影響の総体を明らかにするには、多様な視点が欠かせない。まさに学問横断的な研究が必要な状態であった。

また、現在日本茶の輸出量は少しずつ増えているが、それでも最盛期であった幕末・明治期とは比べるべくもない。日本茶にはどのような限界があったのか。日本の茶業や茶文化は世界からどのように見られ、さらにそこからどのような影響を受けていたのか。グローバルな視野から問い直す必要もあった。

２．研究の目的

それゆえ我々は本研究に取りかかったのだが、その際最終的な目標として次のようなものを想定した。（１）日本茶業・茶文化の影響力や限界性を過去にさかのぼって学問横断的かつグローバルな視点から明らかにすることで、日本の茶業界が再生するためのヒントを探る。（２）研究の過程で、これまであまり注目されてこなかった日本茶業・茶文化関連資料（日本の地方文書や海外に所蔵されている欧文史料など）を発掘する。（３）研究成果を出版物の刊行やシンポジウムの開催、お茶関連イベントでの展示活動などを通して研究成果を広く社会に伝える。（４）それらを通して、輸出の不振や高齢化などの問題で悩む日本の茶業界、および茶業を主な収入源として暮らす人々が住む地域社会にも研究成果を還元する。

なお、日本を代表する茶どころであり、それに関係する多くの人的・物的資源を有する静岡を拠点とすることは、こうした研究をする上で極めて有利であったと考えている。

３．研究の方法

方法としては、人文科学系を中心とした様々な専門分野（歴史学〔日本史・世界史〕・文学・文化研究）の視点を活用した。具体的には、歴史学のメンバーは主に政治・経済・社会と茶との関係を、文学・文化研究のメンバーは社会や文化との関係をそれぞれ重点的に考察した。また、地域の多様性（日本・中国・アメリカ・ロシア・イギリス）、および長期的な視点（近世・近代・現代）もそこに加味した。そうした成果を総合することでグローバルな場において日本茶の位置づけがどのように変容したのかを歴史的に跡づけることが可能となると考えた。

また、本研究では、日本の茶業・茶文化に関する新史料の発掘も目的の一つとしていたため、メンバーそれぞれのフィールドで史料調査を行った。本来であれば国外でも史料調査を複数回行う予定であったが、COVID-19 のパンデミックにより、計画していた調査の多くを中止せざるを得なかった。ただ、そうした情況を鑑み、早い段階からインターネットを利用した史料入手の方法を探り、結果的に大きな成果をおさめるに至った。

４．研究成果

（１）日本とアジア（特に中国・台湾）の茶・茶文化関連史資料の収集・発掘・整理

研究開始以前の段階で、日本や台湾の茶に関する戦前戦後の基本史料を纏めたものとして、寺本益英編『日本茶業史資料集成』24 冊（文生書院、2003 年～）などがあった。また、中国茶に関するものでは布目潮風編著『中国茶書全集』2 巻（汲古書院、1988 年）、陳湛綺責任編輯『民国茶文献史料彙編』5 巻（全国図書館文献縮微複製中心、2009 年）、方健彙編校證『中国茶書全集校証』7 冊（中州古籍出版社、2015 年）、福建省図書館編『閩茶文献叢刊』8 冊（国家図書館出版社、2016 年）、許嘉璐編『中国茶文献集成』50 冊（文物出版社、2016 年）、などがあった。それらのうちいくつかはすでに本研究プロジェクトメンバーの所属機関に所蔵されていたが、このたび未入手だったものをすべて購入することができた。特に、『閩茶文献叢刊』と『中国茶文

献集成』を揃えられたことで、中国茶に関する研究を大いに進めやすくなった。
　また、欧文史料もインターネット古書店を利用していくつか入手できた。まず、アメリカ合衆国で刊行されていた茶・コーヒー・スパイスなどの業界誌『ザ・スパイス・ミル』の 1925 年から 1949 年までの巻を入手できた。本誌はやはりアメリカ合衆国で刊行されていた業界誌『ティー・アンド・コーヒー・トレード・ジャーナル』と同様、近代における世界的な茶業の動向を知る上で欠かせない史料だが、これまで日本国内に所蔵がなかった。さらに、戦前における日本茶輸出の最大手のひとつであったホイットニー社が刊行した広報パンフレットである『ティー・トークス』を 1 号から 9 号まで入手できた。これもこれまでに日本の図書館に所蔵されていなかったものである。そのほか、インターネット上のデジタル・ライブラリーなどを通して欧文史料のデータを多く手に入れることができた。これらの史料により、グローバルな視野から近代の日本茶を捉えることがこれまで以上にできるようになった。
　このように、近年日本やアジアの茶関係の史料へのアクセスが容易になったが、他方でそれら史料集に収録されていない史料も依然として膨大なことが研究を通して明らかになってきた。そこで、国内外の以下のような所蔵機関で史料調査を行った。

　国内：国立国会図書館、国立公文書館、アジア経済研究所図書館、国文学研究資料館、茨城県立歴史館、横浜開港資料館、静岡大学図書館、静岡県立図書館野菜茶業研究所図書館（金谷)、静岡県立農林環境専門職大学図書館、フェルケール博物館、愛知大学図書館、岐阜大学図書館
　国外：中央研究院近代史研究所図書館、国立台湾図書館（いずれも台湾）

　各館では著作権の範囲内で必要に応じてコピー・スキャン・写真撮影を行った。また、これらのほか、個人宅にて以下のような日本近世の地方（じかた）文書の調査も行った。

　島田市伊久身地区所在古文書、河村隆夫家文書（島田市)、勝山家文書（川根本町)、 水野敬志家所蔵文書（掛川市）

　以上の史料の一部については、すでに出版物や講演会などを通して史料紹介がなされている。また、『ザ・スパイス・ミル』と『ティー・トークス』については、静岡市で開催された「世界お茶まつり 2022」の場でも展示を行った。
　COVID-19 流行の影響で海外はおろか国内でも調査の範囲が大きく制約された。それでも以上のような史料を集めることができたことで、COVID-19 流行下でもなんとか研究を遂行することができた。

（２）各時代・地域に関する研究の成果
　研究分担者の今村は、幕末明治期の熊本藩に関する文書から、当該時期の熊本における茶生産の実態に迫った。幕末に日本国内のいくつかの港が対外開港されると、多くの物産が海外に輸出されたが、茶もその一つだった。その際、長崎からも茶が多く輸出されたが、当然のことながら、そうした茶の多くは九州で生産されたものであった。そのため、当時熊本藩でも茶生産を奨励し、そこから利益を得ようとしたが、それが具体的にどのようになされ、領民もそれにどのように反応したのか、についてはこれまでの研究で十分に明らかにされていなかった。今村はそれを細川家文書「町在」と古閑家文書に含まれるいくつかの史料から検討した。その成果は「幕末維新期熊本藩の茶生産と地域社会」（仮）という論文にまとめられる予定である。
　研究協力者の岡村は、戦前日本最大の輸出用茶葉の生産地であった静岡の茶生産・流通に関する史料を精力的に収集し、考察した。具体的には、島田市大代の河村家の文書などをもとに、大正期に静岡県茶業監督員として静岡県の茶の品質管理を厳しく指導した河村宗平の事績を丹念に追った。その結果、これまでその実態がほとんど知られていなかった静岡県の茶業監督員の動きについて、多くのことを明らかにすることができた。また、それを通して、当時静岡県が輸出茶向けの新たな製茶法（「明治三八年式製茶法」）をどのように広め、他方でそれとは異なる製法で作られた「不正茶」をどのように取り締まろうとしていたのか、その具体像を明らかにすることができた。この知見は後日「大正期の静岡県における製茶の実態―製茶監督員河村宗平の指導記録を中心に―」（仮）という論文にまとめられる予定である。
　以上、今村と岡村は、幕末・明治・大正時期の熊本と静岡において、どのように茶が生産されていたのかについてそれぞれ検討した。そうした茶は日本の各港から海外に輸出された。とりわけ 20 世紀以降になると茶輸出における清水港の位置づけが大きくなるが、清水港の対外開港に向けた動きについては、研究分担者の粟倉が詳しく論じた（「1879 年の清水港の開港運動」)。
　ところで、そうした港から輸出された日本茶は輸出先においてどのように認識されたのだろうか。これまでの研究からも、日本が戦前、特に 1920 年代にアメリカ合衆国などで日本茶宣伝を積極的に展開していたことがよく知られる。ただ、当時合衆国においては日本茶以外にもインド茶やセイロン茶、ジャワ茶、台湾茶、中国茶などの宣伝キャンペーンもされていた。研究代表者の戸部はそのうち、20 世紀初頭まで日本茶のライバルであった中国茶の宣伝のあり方について、合衆国の茶業界誌の記述などから検討し、日本茶宣伝のあり方と比較した。その結果、当時合衆国での中国茶宣伝は主に合衆国の茶貿易会社が担っており、中国の茶業界や政府はほとんどそれに関わっていなかったことが明らかになった。これは日本が自国の茶業界や政府、さらに

は合衆国の茶貿易会社などから強力なバックアップを受けていたのとは対照的である。ただし、合衆国の茶貿易会社のなかには中国茶・日本茶両方の宣伝に関わっていた会社もあり、彼らがどこかの国の茶「だけ」を応援していたわけでなかったことが分かった。この知見は後日「1910～20 年代のアメリカ合衆国における中国茶の宣伝―ハリソンズ&クロスフィールド社系企業との関わりを中心に―」（仮）という論文にまとめられる予定である。

さて、戦前における日本茶の主な輸出先はアメリカ合衆国であったが、1920 年代中ごろ以降に同国への輸出量が減少傾向になるとソ連や北アフリカが新たな輸出先として注目されるようになった。研究分担者の吉田が検討したのは、1930 年代のモロッコ向け輸出についてである。吉田は、日本の茶業界誌『茶業界』の記事を丹念に読み込み、当時の日本の茶業者がモロッコ市場をどのように認識していたのか、またそうした認識と実際に起こっていた情況との間にどのような齟齬があったのか、について検討した。日本茶のモロッコ輸出の動向に影響を与えた要素として当時の中国茶の動向にも目配せをしている点が従来の研究とは異なる点である。この知見は後日「日本茶のモロッコ向け輸出に関する『茶業界』の記事目録（1930 年代）」（仮）という論文にまとめられる予定である。

以上、戸部と吉田は日本茶の海外輸出、および海外での販売に着目して検討を行ったが、それでは輸出先で茶はどのように消費されたのだろうか。研究分担者の鈴木は、西洋と東洋での茶にまつわる名言を検討することで、西洋では喫茶を通して即時的な平穏、幸せ、落ち着き、安心、さらには人とコミュニケーションをとる喜びを得ることが期待されてきた一方で、東洋では健康、長寿、不老不死といった要素がとかく重要視されてきたことを指摘した。この知見は後日「「お茶ある限り希望あり」？」（仮）という論文にまとめられる予定である。

以上の成果については、2023 年 3 月に静岡大学で開催したシンポジウム「グローバルな視野からとらえた日本の茶と茶文化に関する学問横断的研究」で報告された。シンポジウムには研究者だけでなく静岡の茶商、技術者、行政関係者などの参加もあり、各界のプロ同士による有意義な議論が展開された。

また、上記以外の研究成果についても出版物やシンポジウムなどを通して発表されている。さらに、研究代表者が研究で得た知見の一部は、静岡大学の学際科目「茶の世界」を通して学生にも伝えられた。以上を通して研究成果の茶業界や地域社会への還元という目標の一端は達成できたと考えている。

（３）今後の展望

日本茶は日本国内での生産→海外輸出に向けた再製→海外への輸出→海外での販売を経て最終的に海外で消費されたが、これまでは各段階での有り様のみが個別的に研究されることが多かった。本研究プロジェクトでは、専門分野の異なる研究者が集まって上記の各段階を横断的に研究することで、戦前に日本茶が生産され、海外で消費されるまでの一連の流れを、いまだ初歩的ではあるが大局的な視点から捉えることができた。それにより各段階間でのミスマッチのようなものもいくつか見つけることができた。例えば、本プロジェクトの岡村の研究からは、1910 年代以降に輸出量増加のために日本茶の品質向上を目指す動きが盛んになっていたことが分かった。ただ、吉田の研究からは、1930 年代にソ連や北アフリカのモロッコに一時的に多くの日本茶が輸出されていたが、それは日本茶の品質が良かったから「だけ」ではなかった、ことが明らかにされた。つまり、日本茶輸出低迷（または一時的な輸出量増加）の理由はこれまで考えられていたよりもずっと多様であったのではなかろうか。それに気が付いたことは、本プロジェクトの重要な成果の一つだと考えるし、それゆえに取り組むべき課題はいまだ多く残されている。

そこで今後の研究では、これまでの研究蓄積をもとに、引き続き戦前から、可能であれば 1960 年代までの日本茶の生産→再製→輸出→販売→消費の流れを総体的に再検討したい。その際は今回のプロジェクトではほとんどできなかった海外での史料調査も本格的に行いたいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 今村直樹	４．巻 6
２．論文標題 地域史からみた北里柴三郎―小国時代とその周辺―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 永青文庫研究	６．最初と最後の頁 53-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 戸部健	４．巻 17
２．論文標題 J・C・ホイットニー社の広報パンフレット『ティー・トークス』（Tea Talks）について	５．発行年 2022年
３．雑誌名 アジア研究	６．最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鈴木実佳	４．巻 72-2
２．論文標題 都市生活とビール―家庭とノスタルジア	５．発行年 2021年
３．雑誌名 人文論集	６．最初と最後の頁 127-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 吉田建一郎	４．巻 72-3
２．論文標題 昭和高等商業学校の主要刊行物と記事目録	５．発行年 2021年
３．雑誌名 大阪経大論集	６．最初と最後の頁 235-240
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 今村直樹	4．巻 11
2．論文標題 書評 木越隆三著『加賀藩改作法の地域的展開ー地域多様性と藩アイデンティティーー』	5．発行年 2021年
3．雑誌名 加賀藩研究	6．最初と最後の頁 46-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今村直樹	4．巻 5
2．論文標題 近世後期藩領国の河川分水問題と流域社会―熊本藩領の白川を事例に―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 永青文庫研究	6．最初と最後の頁 25-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉田建一郎	4．巻 71巻2号
2．論文標題 1930年前後の日ソ茶貿易	5．発行年 2020年
3．雑誌名 大阪経大論集	6．最初と最後の頁 57-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 今村直樹	4．巻 10
2．論文標題 近世近代移行期の天竜川治水事業と「非領国」「藩領国」―渡辺・伴野・淺井報告について―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 静岡県地域史研究	6．最初と最後の頁 52-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今村直樹	4．巻 101
2．論文標題 地方行財政の「維新」―明治三年熊本藩雑税廃止再考―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 熊本史学	6．最初と最後の頁 101-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今村直樹・竹山瞬太	4．巻 4
2．論文標題 近世後期の在御家人制度と熊本藩政―細川家文書「在中　下」（抄出）について―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 永青文庫研究	6．最初と最後の頁 51-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 戸部健	4．巻 45
2．論文標題 コロナ禍での資料集めについて	5．発行年 2021年
3．雑誌名 中央大学文学部東洋史学研究室白東史学会会報	6．最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 粟倉大輔	4．巻 2019
2．論文標題 茶業史における物流インフラの整備―静岡県の事例を中心に―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ふじのくに茶の都ミュージアム研究紀要・年報	6．最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計32件（うち招待講演　20件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 粟倉大輔
２．発表標題 近代における清水港の開港運動
３．学会等名 静岡県立大学グローバル地域センターシンポジウム「清水港の歴史から見る日本とアジア～今後の地域史研究の課題～」
４．発表年 2022年

１．発表者名 岡村龍男
２．発表標題 清水港関係史料の所在と保存活用
３．学会等名 静岡県立大学グローバル地域センターシンポジウム「清水港の歴史から見る日本とアジア～今後の地域史研究の課題～」
４．発表年 2022年

１．発表者名 鈴木実佳
２．発表標題 お茶ある限り希望あり
３．学会等名 第27回静岡健康・長寿学術フォーラム 「お茶と一服、健康と安全から長寿を考える」
４．発表年 2022年

１．発表者名 今村直樹
２．発表標題 近代移行期の「地域資産」をめぐる論点
３．学会等名 日本史研究会12月例会
４．発表年 2022年

１．発表者名 戸部健
２．発表標題 嗜好品と健康飲料のあいだ―近代中国における茶をめぐる言説―
３．学会等名 「近現代東アジアにおける「健康観」形成の比較史研究」研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 鈴木実佳
２．発表標題 喫茶と集い―イギリスと日本の文学から―
３．学会等名 シンポジウム グローバルな視野からとらえた日本の茶と茶文化
４．発表年 2023年

１．発表者名 吉田建一郎
２．発表標題 1930年代、日本茶のモロッコ向け輸出について
３．学会等名 シンポジウム グローバルな視野からとらえた日本の茶と茶文化
４．発表年 2023年

１．発表者名 岡村龍男
２．発表標題 大正期の静岡県における製茶の実態―製茶監督員河村宗平の指導記録を中心に―
３．学会等名 シンポジウム グローバルな視野からとらえた日本の茶と茶文化
４．発表年 2023年

１．発表者名 戸部健
２．発表標題 1920年代のアメリカ合衆国における中国茶の宣伝―日本茶の宣伝との比較から―
３．学会等名 シンポジウム グローバルな視野からとらえた日本の茶と茶文化
４．発表年 2023年

１．発表者名 戸部健
２．発表標題 「茶どころ」静岡の現在、およびその対外的取組み
３．学会等名 講座「アジア共同体の可能性」第5回　座談会：地方自治体のアジア諸地域交流の諸相（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 吉田建一郎
２．発表標題 両次大戦之間的華中茶葉貿易和日文資料
３．学会等名 2021年中国歴史地理学国際学術研討会（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 今村直樹
２．発表標題 天保期熊本藩の政治抗争と「上書」
３．学会等名 熊本史学会秋季研究発表大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 今村直樹
２．発表標題 旧藩の資産と事業のゆくえ―藩研究と大名華族研究をつなぐために―
３．学会等名 シンポジウム「大名華族家と地域社会」（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 岡村龍男
２．発表標題 渋沢栄一と清水
３．学会等名 ぶんかさろん清水（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 岡村龍男
２．発表標題 渋沢栄一の商法会所と島田
３．学会等名 島田市伊久身農村環境改善センター（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 岡村龍男
２．発表標題 渋沢栄一と静岡―日本資本主義胎動の10か月―
３．学会等名 駿府博物館短期歴史講座（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 岡村龍男
２．発表標題 澤野精一―お茶とミカンを世界へ―
３．学会等名 駿府博物館短期歴史講座（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 岡村龍男
２．発表標題 山林資源をめぐる神戸・今宮と東泉院
３．学会等名 富士市神戸まちづくりセンター講演（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 岡村龍男
２．発表標題 江戸から明治初年の静岡県における急激な人口変動の要因―家康政権の成立と崩壊、静岡藩の成立を中心に―
３．学会等名 静岡県立大学グローバル地域センター公開セミナー「世界から見た静岡県の人口と社会―人口・災害・産業―」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 岡村龍男
２．発表標題 『渋沢栄一と静岡―改革の軌跡をたどる』を刊行して
３．学会等名 静岡県近代史研究会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 岡村龍男
２．発表標題 澤野精一と庵原地区の農業開発―庵原のお茶とみかんを世界へ―
３．学会等名 静岡市庵原生涯学習交流館『まちづくり講演会』（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 今村直樹
２．発表標題 転勤・兼帯庄屋の成立過程とその特質―熊本藩を事例に―
３．学会等名 科研費研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 粟倉大輔
２．発表標題 東海道線開通、清水港国際貿易港化と静岡茶
３．学会等名 初期島田茶業史展vol.4「明治・大正時代　統一静岡茶の誕生」シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 岡村龍男
２．発表標題 静岡藩出仕時代の渋沢栄一―商法会所・常平倉をめぐって―
３．学会等名 駿府博物館短期歴史講座（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 岡村龍男
２．発表標題 「清水市史所蔵史料」及び清水港関係史料の構造と性格
３．学会等名 清水港の歴史をつなぐ懇話会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 岡村龍男
２．発表標題 江戸時代の伊久身の人々がまとめた『歴史書』―戦国大名・お殿様・茶生産の記憶―
３．学会等名 伊久身農村環境改善センター歴史講座（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 岡村龍男
２．発表標題 新発見の古文書から読み解く藤枝宿白子町の歴史―保福島屋小花家文書の紹介―
３．学会等名 藤枝市郷土博物館歴史講座（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 岡村龍男
２．発表標題 渋沢栄一と静岡茶の成長―日本資本主義の父とわたりあった静岡の茶業者たち―
３．学会等名 日本茶インストラクター協会静岡市支部研修会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 岡村龍男
２．発表標題 明治・大正時代の静岡県における製茶取締の系譜と製茶法
３．学会等名 初期島田茶業史展vol.4「明治・大正時代　統一静岡茶の誕生」シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 岡村龍男
２．発表標題 渋沢栄一と静岡―渋沢栄一の飛躍を支えた静岡の人々の実力に迫る―
３．学会等名 浅間通り商店会　夢門前歴史塾（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 岡村龍男
２．発表標題 大井川流域の茶業史―川根から牧之原台地まで―
３．学会等名 島田近代遺産学会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 岡村龍男
２．発表標題 ２９歳の渋沢栄一 ―変革する時代への対応力―
３．学会等名 NHK静岡放送局開局90周年　大河ドラマ「青天を衝け」PRイベント（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計13件

1．著者名 熊本大学永青文庫研究センター,稲葉継陽、今村直樹著	4．発行年 2023年
2．出版社 吉川弘文館	5．総ページ数 432
3．書名 細川家文書　災害史料編	

1．著者名 濱下武志編、椿原靖弘、望月憲一、粟倉大輔、岡村龍男ほか著	4．発行年 2023年
2．出版社 静岡県立大学グローバル地域センター	5．総ページ数 116
3．書名 21世紀アジアのグローバル・ネットワーク構築と静岡県の新たな役割・報告集 清水港の歴史から見る 日本とアジア～地方史研究の成果と課題～	

1．著者名 福士由紀、市川智生、アレクサンダー・R・ベイ、金穎穂編著、趙菁、戸部健、ハイン・マレー、星野高徳、平体由美、飯島 渉、井上弘樹著	4．発行年 2022年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 296
3．書名 暮らしのなかの健康と疾病	

1．著者名 今村直樹、小関悠一郎編著、稲葉継陽、木越隆三、高槻泰郎、森正也、安高啓明、神谷大介、白石烈、高木不二著	4．発行年 2021年
2．出版社 吉川弘文館	5．総ページ数 326
3．書名 熊本藩からみた日本近世	

１．著者名 熊本大学永青文庫研究センター編、稲葉継陽、今村直樹、小関悠一郎、高槻泰郎著	４．発行年 2022年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 424
３．書名 細川家文書　意見書編	

１．著者名 岡村龍男	４．発行年 2021年
２．出版社 静岡新聞社	５．総ページ数 282
３．書名 渋沢栄一と静岡　改革の軌跡をたどる	

１．著者名 創立100周年プレ事業実行委員会編、鈴木実佳、戸部健、橋本剛、安藤研一、横濱竜也、山本歩、徳元俊伸、北村晃寿、森田健、毛利出、松本敏隆、鈴木信行、依岡輝幸、田中直樹、浅野安人著	４．発行年 2021年
２．出版社 静岡大学人文社会科学部、理学部、岳陵会、理学同窓会	５．総ページ数 76
３．書名 旧制静岡高等学校創立100周年記念プレ事業報告書―文理両面から迫る新型コロナウイルスと自然災害―	

１．著者名 今村直樹	４．発行年 2020年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 394
３．書名 近世の地域行財政と明治維新	

１．著者名 熊本大学永青文庫研究センター編、稲葉継陽、今村直樹著	４．発行年 2021年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 472
３．書名 細川家文書　地域行政編	

１．著者名 公益財団法人永青文庫、熊本大学永青文庫研究センター編、稲葉継陽、山田貴司、伊藤千尋、後藤典子、佐々木英理子、今村直樹、舟串彩著	４．発行年 2020年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 244
３．書名 永青文庫の古文書	

１．著者名 Kimiyo Ogawa, Mika Suzuki編著、Greg Clingham, Hideichi Eto, Noriyuki Harada, Yuri Yoshino, Miki Iwata, Noriyuki Hattori, Tadayuki Fukumoto, Masaaki Ogura, Hitoshi Suwabe著	４．発行年 2020年
２．出版社 Rutgers University Press	５．総ページ数 214
３．書名 Johnson in Japan	

１．著者名 久保亨・瀧下彩子編著、山本真、弁納才一、富澤芳亜、高田幸男、浅田進史、田中比呂志、松重充浩、吉田建一郎、吉澤誠一郎、本庄比佐子著	４．発行年 2021年
２．出版社 公益財団法人東洋文庫	５．総ページ数 406
３．書名 戦前日本の華中・華南調査	

１．著者名 静岡県編、鬼頭宏、小和田哲男、岡村龍男、川口洋、岸昭雄、日下宗一郎、斎藤成也、白井千晶、高橋眞一、高橋美由紀、中鉢賢治、四方田雅史著	４．発行年 2021年
２．出版社 静岡県	５．総ページ数 870
３．書名 静岡県史　別編４　人口史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鈴木　実佳 (Suzuki Mika) (40297768)	静岡大学・人文社会科学部・教授 (13801)	
研究分担者	今村　直樹 (Imamura Naoki) (50570727)	熊本大学・永青文庫研究センター・准教授 (17401)	
研究分担者	吉田　建一郎 (Yoshida Tateichiro) (60580826)	大阪経済大学・経済学部・准教授 (34404)	
研究分担者	粟倉　大輔 (Awakura Daisuke) (60757590)	帝京大学・経済学部・講師 (32643)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	岡村　龍男 (Okamura Tatsuo)	豊橋市図書館・学芸員	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関